

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

接触と変容の諸相：サタワル島における集団改宗： キリスト教と伝統宗教

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-02-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石森, 秀三 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003742

サタウル島における集団改宗

——キリスト教と伝統宗教——

石 森 秀 三*

- | | |
|------------------|-------------------|
| I. はじめに | IV. 集団改宗にともなう文化変化 |
| II. キリスト教受容のプロセス | 1. 多神論から一神論へ |
| III. 集団改宗の諸要因 | 2. 天国と地獄の観念 |
| 1. 社会的要因 | 3. 秘儀的知識の喪失 |
| 2. 政治的要因 | 4. 社会関係の変化 |
| 3. 宗教的要因 | V. おわりに |

I. はじめに

人はいかにして、自らが信じる神をすて、新たなる神をうけいれることができるのであろうか。改宗は、価値観の一大転換であり、その人の生きざまに大いなる影響をあたえる。それゆえ、一人の人間が改宗にいたった動機をすることは、その人の「人となり」をしるうえで不可欠の重要性をもつ。同様のことが、集団の場合にもあてはまる。集団改宗は、一つの集団における価値観の一大転換であり、集団にとっての重大事である。そのため、集団改宗にいたったプロセスをすることは、一つの集団がもつ価値体系を把握するうえにおいて不可欠の重要性をもつ。

太平洋の島々では、18世紀以降におけるヨーロッパの列強による植民地化にともなうて、各地でキリスト教への改宗がなされた。改宗にいたったプロセスはそれぞれの島々がおかれていた政治的・経済的・文化的状況によって異なるが、キリスト教が太平洋の島々にいきる人々にあたえた影響は、どの島においてもはかりしれないものがあった。太平洋の島々における社会的・文化的変化の動因は、もちろんキリスト教の受容だけではない。植民地行政や貨幣経済の浸透・新しい物品の流入・学校教育制度の導入など、さまざまな動因があるが、今日の太平洋の島々における近代化にともなう社会的・文化的変化を把握するうえにおいて、キリスト教受容にともなう諸問題を

* 国立民族学博物館第4研究部

さけてとおることができない。

太平洋の島々におけるキリスト教への改宗にともなう諸問題については、これまでに人類学者や歴史学者が、さまざまな形でとりあげてきた¹⁾。けれども、それらの研究は、主としてポリネシアやメラネシアの島々におけるキリスト教への改宗の問題をとりあげており、マイクロネシアの島々に関する事例研究は比較的少ない²⁾。また、多くの研究は、ニュージーランドやトンガ諸島やフィジー諸島など、規模の大きな島々の事例を主としてとりあげており、小さなサンゴ礁の島々におけるキリスト教への改宗の事例は比較的とりあげられていない。そのため、本稿はマイクロネシアのサタワル(Satawal)島という、小さなサンゴ礁の島におけるキリスト教への改宗とそれにともなう社会的・文化的変化を明らかにすることを目的としている。サタワル島は、カロリン諸島の中央部に位置する隆起サンゴ礁の島であり、人口500人(1980年)、周囲6キロメートルという、小島である。

サタワル島をとりあげる第1の理由は、2度にわたるフィールド・ワークのさいに収集したデータにもとづいて、キリスト教の受容にともなう諸問題に関して民族誌的記述をおこなうことが可能な点にある。サタワル島では、1978年6月から9月にかけて予備調査をおこない、1979年5月から1980年3月にかけて本調査をおこなった³⁾。第2に、サタワル島のような小規模な島は社会的・文化的状況が比較的錯綜していないので、この種の研究に最適という利点を有するためである。キリスト教への改宗は、ただ単に宗教的要因によってのみ生じるものではなく、広範囲にわたる政治的・社会的・文化的要因が関与している。規模の大きな火山島などの場合には、政治的・社会的・文化的要因が多岐にわたるとともに、複雑に錯綜しているために、キリスト教への改宗にともなう諸問題を明らかにするのは容易ではないのに対して、小規模なサ

1) 人類学者による太平洋の島々におけるキリスト教研究は数多くある。とくに、アメリカのオセアニア社会人類学会(Association for Social Anthropology in Oceania)は、1975年に“Mission, Church, and Sect in Oceania”と題するシンポジウムをひらき、太平洋の島々におけるキリスト教受容にともなう諸問題を広い視野からとりあげている [BOUTILIER, HUGHES and TIFFANY (eds.) 1978]。また、日本人研究者による太平洋の各地におけるキリスト教に関する研究も蓄積されている [青柳 1985; 橋本 1986, 1987; 石森 1974, 1982; 中山 1985, 1988]。

2) ミクロネシアにおけるキリスト教受容にともなう諸問題の人類学的研究としては、つぎを参照 [青柳 1985; BLACK 1978; MARSHALL and MARSHALL 1974; 中山 1985, 1988; NASON 1978; 須藤 1988]。

3) サタワル島におけるフィールド・ワークは、文部省科学研究費補助金(海外学術調査)の交付をうけておこなった。そのさいに、サタワル島の3人の首長をはじめ、数多くの人々にたいへんお世話になった。ここに、記して深甚なる謝意を表しておきたい。また、フィールド・ワークのさいには、共同調査者である国立民族学博物館の須藤健一氏と秋道智彌氏から数多くの有益な示唆をうけた。また、須藤氏と中山和芳氏には、本稿をまとめるにあたって、数々の助言をいただいた。深く謝する次第である。

タウル島の場合には状況の把握が比較的容易といえる。第3に、サタウル島では、1953年に島をあげてキリスト教への集団改宗がなされている点がある⁴⁾。大規模な島の場合には、島をあげての集団改宗は稀であり、同一の島の内部においてキリスト教に「改宗した者（集団）」と「改宗していない者（集団）」との対立や、「カトリック教会に入信した者（集団）」と「プロテスタント教会に入信した者（集団）」との対立などが生じやすい。その結果、キリスト教への改宗にともなう社会的・文化的変化のあり方も多面的に展開しがちである。また、サタウル島では、本格的な布教がはじまってから、10年たらずのうちに集団改宗がおこっており、布教に長時間を要した島とくらべると、キリスト教受容にともなう社会的・文化的変化が多面的には生じていないために、問題点をより明確にできる点も重要である⁵⁾。

Ⅱ. キリスト教受容のプロセス

サタウル島の人々とヨーロッパ人との出会いが最初に記録にとどめられたのは、1797年のことと推定されている [HEZEL 1979: 17]。それには、ロンドン伝道協会 (London Missionary Society) が関与している。ロンドン伝道協会は、1788年に出版された George Keate の著書 *An Account of the Pelew Islands* に触発されて、ミクロネシアにおける伝道の可能性をさぐるために、1797年に教会関係者をのせた Duff 号という船をパラオに派遣した。Keate は、1783年にパラオ群島の近くで座礁した東インド会社の Antelope 号の Henry Wilson 船長らが遭遇したことを聞き書きにまとめて、上記の本を出版した [KEATE 1788]。この本は出版されてから6年のうちに6版をかさねるほど、数多くの読者を獲得し、18世紀のイギリスにおいて広く愛読されたといわれている。当時、ロンドン伝道協会では、ポリネシアのトンガ諸島やマルケサス諸島などですでに布教を開始していたが、ミクロネシアにおける布教の可能性を検討するために、帰路にパラオ群島方面をおとずれた。

4) 小規模な島におけるキリスト教への集団改宗の事例研究としては、つぎを参照 [MONBERG 1962, 1967]。

5) たとえば、ティコピア (Tikopia) 島の場合には、1901年に英国聖公会 (Church of England) のメラネシア伝道団 (Melanesian Mission) によって教会が設立され、本格的な布教活動が開始された。当初は、ほとんどの人々が改宗しなかったが、1923年に最初の集団改宗が生じた。しかし、島の西部に居住する clan が集団的に改宗しただけであり、島の人口の半数のみであった。Raymond Firth が最初の調査をおこなった1929年の時点では、全人口1278人のうち、キリスト教への改宗者が643人であり、ほぼ半数であった。キリスト教への改宗を拒絶していた2人の首長が最終的に改宗したのは、1956年のことであり、それによって島全体がキリスト教化された。本格的な布教がはじまってから、約半世紀後のことである [FIRTH 1967, 1970]。

Duff号は、1797年の10月25日の午前9時頃に、サタワル島に立ち寄った。以下、Wilson船長の記述にもとづいて、サタワル島の人々とDuff号との出会いを再現すると、つぎのようになる [WILSON 1799: 298-301]。Duff号が島に到着すると、島人がカヌーをこぎよせ、“Capitaine!(船長)”と何度もさけんで、物々交換をせまった。Capitaineとさけぶのをきいて、Wilson船長は島の人々がすでにヨーロッパ人との出会いを経験していると判断した。幾人かの島人を乗船させたところ、かれらは貝製の釣針やココヤシ殻繊維製のロープなどを持参し、物々交換を要求した。かれらがかつともほしがったのは金属製品であったが、その他のいかなるものとの交換にも応じた。乗船した島人は、他の島の場合とは異なり、物をぬすもうとはしなかったが、カヌーによって船のまわりにいる男たちが、船のロープの鉄製留め具をぬすもうとしたので、全員に退去を命じた。その日の夕方、夕食をとろうとしたときにふたたび騒ぎがおこった。島人がカヌーで近づき、船のロープの鉄製留め具をぬすもうとしたのである。そこで、船長が銃を数発うったところ、島人は蜘蛛の子をちらすようににげさった。そのさいに、Duff号の2人のイギリス人船員が船から逃亡をくわだて、海にとびこんだ。2人ともタヒチ島などでbeachcomberを経験した札付きの男たちであり、英国本国にかえっても将来性がないので、beachcomberとしてサタワル島でいきる道を選択したのである。Wilson船長は銃を発砲せずに、逃亡をゆるした。しかし、資源に乏しい小島での生活は厳しいはずであり、2人の不幸な選択を哀れんだ。翌日、西隣のラモトレック(Lamotrek)環礁を発見したが、ここでも別の乗組員が船長に島でくらしたいと願いでて許可された。その男は、タヒチ島でbeachcomberとして生活経験のあるスウェーデン人であった。

このようなWilson船長の記述をよむと、サタワル島のような離島でも18世紀末の段階ですでにbeachcomberがおり、ヨーロッパ人との少なからぬ接触のあったことが明らかである。しかも、サタワル島が属する中央カロリン諸島の島々では、古くからマリアナ諸島方面にアウトリッグ・カヌーによる遠洋航海がおこなわれており、グァム(Guam)島などですでにスペイン人と出会っていた。グァム島では、1668年からスペイン人神父によって布教活動が開始され、教会も設立されていた [HEZEL 1970: 213]。グァム島在住の神父は、中央カロリン諸島からアウトリッグ・カヌーで到来した島人から情報をえて、かれらを水先案内人として教会の船にのせて、島々をおとずれて布教をこころみだ。とくに、ウリシー(Ulithi)環礁に関しては、18世紀の初め頃にグァム島在住のCantova神父が布教をおこなっている。Cantova神父は、1722年に2隻のカヌーでグァム島にやってきたウリシー環礁の人々を手厚くもてなし、か

これらの言語や習慣を研究したのちに、1728年になってからかれらを教会の船にのせてウリシー環礁に布教にかけた。当初、布教は大成功をおさめ、127人の子どもが受洗したと報告されている [HEZEL 1970: 218]。しかし、島人によるキリスト教への改宗は表面的なものであったために、やがて Cantova 神父は島人と折り合いが悪くなり、最終的に槍で刺し殺されるという悲劇が生じている。

Cantova 神父の死にともなって、カロリン諸島におけるキリスト教の布教活動は下火になり、その後約150年間にわたって沈滞した状態がつづいた。ところが、1886年になって、スペインのフランシスコ会一派であるカプチン修道会がカロリン諸島における布教を担当することになり、事態が一変した [HEZEL 1970: 221]。カプチン修道会では、カロリン諸島を2つの地域にわけ、東部ではポナペ (Ponape) 島を拠点とし、西部ではヤップ (Yap) 島を拠点として布教をおこなうことになった。1886年6月に、6人のカプチン修道会神父がヤップ島に到着し、カロリン諸島の西部における布教活動に着手した。そして、これらの神父がヤップ島の離島における布教も担当した。サタウル島周辺の島々にも神父が来島し、布教をおこなったことが確認されている [BURROWS and SPIRO 1957: 200-201]。サタウル島でも、かつて外国人神父が来島したということが語りつがれているが、それによってキリスト教への関心が喚起されたわけではなかった。しかし、ヤップ島では、カプチン修道会神父による積極的な布教活動によって、19世紀末頃には、約1000人が洗礼をうけ、542人の子どもが教会の学校にかよようになったと報告されている [HEZEL 1970: 222]。

ヤップ島の離島における布教がもう少し活発化したのは、日本統治時代の1930年代である。日本による統治の始まりとともに、2カ月に一度の割で、離島をめぐる連絡船が運航されはじめたのである。神父はその連絡船を利用して布教活動をおこなった。しかし、各島に一日程度しか滞在しないので、ほとんど信者を獲得できなかった。けれども、離島の中心島であるウリシー環礁においては、ある程度の成果をおさめることができ、1937年頃にはかなりの島人がキリスト教に改宗したといわれている [LESSA 1966: 8]。このようなスペイン人神父による活発な布教活動も、太平洋戦争の勃発とともに中断され、ヤップ島在住の二人のスペイン人神父は日本軍によって処刑されたといわれている [LESSA 1966: 8]。

サタウル島の長老の話によると、戦前にルイスという名前の外国人神父が西隣のラモトレック環礁に在住しており、小さな教会をたてて布教活動に従事していたといわれている。サタウル島の人々は、アウトリガ・カヌーをもちいてラモトレック環礁に頻繁に航海していたので、その外国人神父の話をきく機会があった。その影響で、

サタワル島の数人がキリスト教に関心をいだいたといわれている。

サタワル島におけるキリスト教の布教が本格化するのには、太平洋戦争後のことである。戦後、ミクロネシアの島々は、アメリカ海軍によって1951年まで統治がおこなわれた。その間に、アメリカ海軍の従軍神父によって布教がなされた。従軍神父は定期的に生活物資をとどける輸送船にのって離島の各島をおとずれ、布教活動をおこなった。しかし、島に定着しての布教ではなかったため、それほど成果をあげることができなかった。

けれども、従軍神父の定期的な来訪によって、少しだけ変化が生じた。島の子どもたちが神父を大歓迎しはじめたのである。もちろん、子どもたちは信仰上の理由から神父を歓迎したわけではない。かれらのお目当ては、キリスト教の福音ではなく、毎回とどけられる菓子やおモチャであった。そうしているうちに、より重要な変化が生じた。子どもたちとともに母親も、神父のもとにあつまりはじめたのである。通訳をとおしてきくキリスト教の教えは、女性たちにとってたいへん好ましいものであった。なぜならば、神のもとでは、人間は皆、平等であると説かれたからである。島の女性たちは、男性とくらべると社会的に差別をうけていた。たとえば、月経中の女性は不浄とみなされ、月経屋に隔離された。また、女性は男性の前では頭を低くしなければならず、ある場合には芋虫のように這わねばならなかった⁶⁾。神父は、神のもとでは男性も女性も平等であり、そのような女性を差別した習慣をまもらなくてもよい、と説いた。そのような社会的状況が背景にあったので、島の女性たちにとって、神父の教えはたいへんうけいれやすい内容をもっていたといえる。

ところが、ほとんどの男性たちは、キリスト教を無視しつつけた。かれらにとって、神父の教えをうけいれねばならない理由が希薄であった。そのため、女性たちも、キリスト教に関心をいだきはじめたが、すぐには改宗できなかった。その結果、サタワル島において、1950年頃までにキリスト教に改宗したのは、ほんの数人（おそらく、5人にも満たない）と推定されている [ALKIRE 1965: 166]。その当時、島の人々は伝統的な神々とともにくらししており、また宗教的職能者が活躍していたので、キリスト教をうけいれる余地がほとんどなかった。

しかし、1953年になって、突然、サタワル島の男性たちがキリスト教受容を真剣に検討しなければならない事態が生じた。その当時、ウリシー環礁をはじめとするヤツ

6) ただし、サタワル島の女性が社会のすべての分野において差別をうけているわけではない。基本的には、政治などの公的領域においては男性優位であるのに対して、家庭などの私的領域では女性優位であるといえる。サタワル島では、男女間における明確な役割分化にもとづく男女関係のケジメとバランスがほどよくとれた社会が形成されていたとみなせる。

プ地区の離島のほとんどの島々がキリスト教に改宗していた。そのような状況のなかで、1953年になって、突然、ウリシー環礁の2人の助祭がサタワル島に派遣されてきた。これらの助祭は、ウリシー環礁在住のアメリカ人神父の助手をつとめていた。2人の助祭は、生活物資をはこぶ連絡船でやってきた。船は長くても一昼夜程度しか、島にとどまらないが、助祭たちは船がさったのちも島にいのこった。キリスト教の集中的な布教をするためである。それからかれらは連日、一番大きなカヌー庫に男性たちをあつめて、キリストの教えを説いた。つぎの連絡船がくるまで約2カ月間にわたって、布教がつつけられた結果、最終的に成人男性を中心に会議がひらかれ、全島をあげてキリスト教に集団改宗することが決せられた。

集団改宗にあたって問題になったのは、伝統的な神々との決別であった。キリスト教は一神教であり、数多くの伝統的な神々との決別が必要であった。サタワル島では、超自然的存在もしくは超人間的存在を、*yanu'* と総称している。*yanu'* は、名のある神格的存在から名のない精霊や人間の死霊にいたるまで、さまざまな超人間的存在を包括的に意味する。サタワル島の人々は、さまざまな神々を認識していた。たとえば、島にはココヤシやパンノキの神々がいたし、海にはカツオや流木の神々があり、そのほかさまざまな神々が認識されていた。ところが、キリスト教への改宗によって、それらの神々と決別しなければならなかった。そこで、まずはじめに伝統的な神々によって課せられた数々のタブーを意図的に侵犯することが試みられた。具体的には、タブーの魚をたべ、聖地にふみこみ、月経屋をたたきこわすことなどが必要であった。1953年に集団改宗が決せられると、ただちに伝統的な神々に対する挑戦が実行にうつされ、つぎつぎとタブーがやぶられた。

しかし、老人や宗教的職能者たちはタブーをやぶることに気乗りがしなかった。かれらは幼いときからタブーを守って生きてきたからである。キリスト教にかわったからといって、すぐにタブーを放棄できなかった。そこで、若い世代が中心になって、タブーへの挑戦がなされた。当時、3人の首長のうち、1人が若い世代にかわったところであったので、その首長が改革の中心になった。まず、はじめになされたのは、月経屋の破壊である。女性の月経はもはや不浄とはみなされなくなったので、月経屋が不要になった。若者たちは斧をもって、月経屋の禁域にふみこみ、月経屋をたたきこわした。ついで、島にあった数カ所の聖地にもふみこんだ⁷⁾。そのほか、各種のタ

7) サタワル島の聖地には、3種類ある。パンノキの神の聖地、カツオの神の聖地、嵐鎮めの神の聖地などであった。これらの聖地は、秘儀的知識の体系である *roong* と深い関わりがあり、それらを修得した宗教的職能者のみが儀礼をおこなうために聖地にはいることがゆるされている。それ以外の一般人の立ち入りは厳しいタブーであった【石森 1985a】。

ブーがやぶられた。キリスト教をうけいれるにあたって、かれら自身にとっての踏絵が必要であったといえる⁸⁾。

タブーをやぶったのちの数カ月間は、島の人々にとって不安な日々であったにちがいない。人々がそれまで信じてきたところによれば、各種のタブーが侵犯されたからには遅かれ早かれ、なんらかの危機（たとえば、「病い」や「飢え」や「天災」など）が生じるはずであった。しかし、幸いにも大きな危機は発生しなかった。そこで、人々はキリスト教の神である Teewus の神聖な力が発揮されたとみなした⁹⁾。それによって、サタワル島の人々は伝統宗教をすてて、キリスト教をうけいれることが可能になったといえる。

Ⅲ. 集団改宗の諸要因

1. 社会的要因

(1) 男性と伝統宗教

キリスト教への改宗は、宗教的要因によってのみなされるのではなく、さまざまな要因が関与している。ここで、まずはじめにサタワル島における集団改宗の社会的要因について検討する。

サタワル島におけるキリスト教受容のプロセスのなかで、まずはじめに明らかなのは、男性よりも女性の方が先に、神父の教えに関心をしめた点である。それには、サタワル島の伝統宗教における男性優位性が深く関わっている。

サタワル島の伝統宗教の中核をなすのは、*roong* とよばれる秘儀的知識の体系である。*roong* は、約40種類の個別の知識体系からなり、それらはすべて特定の伝統的な神々と関係している [石森 1985a, 1987]。たとえば、遠洋航海、漁撈、農耕、病いの治療、カヌーづくり、占い、嵐鎮めなどに関する *roong* がある。これらの *roong* は特定の神が人間にさずけた「神授の知識」とみなされており、特定の宗教的職能者のみがしりうる独占的な知識体系である。そのため、*roong* は誰にでもおしえてよい知識ではなく、特定の血筋の親族にのみ伝授されるべき「秘密の知識」である。*roong* を修得した専門家は *so'wrong* とよばれ、各種の儀礼を主宰することによって、サタワ

8) サタワル島における各種のタブーについては、つぎを参照 [秋道 1981; 石森 1985a, 1985b, 1985c, 1987; 須藤 1980, 1984]。

9) Teewus, Nifiyeeren, patere などは、それぞれ「神」、「地獄」、「神父」を意味する外国語が借用されてサタワル語になったものである。

ル島の伝統宗教における中心的存在として位置づけられた。

roong には、「大きい知識」(*roong temok*)と「小さい知識」(*roong mutik*)という区別がある。前者は社会的に重要な知識体系であり、後者はそれほど重要でないものを意味する。前者のうちでも、とくに「遠洋航海」と「嵐鎮め」と「数占い」に関する *roong* は、社会的にもっとも重要な知識体系とみなされており、それらを修得した *so'wrong* は社会的に尊敬の対象になっている。ところが、それらの *so'wrong* は、月経の女性を厳しく忌避しなければならない。月経の女性をみるのも、その声をきくのもいけないし、その持ち物にふれてもいけない。そのタブーが犯された場合には、*so'wrong* がもっている神聖な呪力が効力をうしなうだけでなく、他の *so'wrong* の呪力も台無しになるといわれる。そのような事態が発生すると、ただちにこれらの三つの *roong* を修得した *so'wrong* がすべてあつめられ、遠洋航海の *roong* の家元 (*rhapin*) によって、清浄儀礼がおこなわれる¹⁰⁾。

いずれにしても、サタワル島における伝統宗教の中核をなすのは秘儀的知識の体系としての *roong* であり、「病い」や「飢え」や「天災」や「事故」などの危機のさいにもちいられ、宗教的職能者としての *so'wrong* が中心的役割をはたしていた。

(2) 女性とタブー

サタワル島の伝統宗教の中核をなす *roong* は基本的に、男性のみが継承し、社会的にもちいることが許されている。女性は *roong* をまなんで *so'wrong* になることができない。そのため、女性は主要な儀礼のさいに排除された。とくに、月経の女性は不浄とされ、社会的に排除の対象になった。月経の女性には、数多くのタブーがかけられており、月経がはじまるとただちに月経屋にいき、ほかの人々から隔離される。月経屋は、居住区のはずれの *Necimwa'nika't* とよばれる特別の区域にたてられており、月経女性と産婦およびその付添いの女性以外の立ち入りが厳しく禁じられている¹¹⁾。月経女性の場合には、月経がおわるまで、そこで生活しなければならない。そのうえ、月経がおわって月経屋をでて自宅にもどってからも、ひきつづき、いくつかのタブーをまもらねばならない。月経屋をでてきた第一日目は、別火のタブーがあり、家

10) 遠洋航海に関する *roong* には2つの流派があり、それぞれに一人だけ *rhapin* とよばれる家元が存在した。*rhapin* はかつて *roong* の修得儀礼やそのほかの重要な儀礼を主宰する中心的な *so'wrong* であった。ちなみに *rhapin* の原義は「(木の)根元」や「……の基礎」の意である。

11) *Necimwa'nika't* は直訳すると、「子どもの家のある所」の意である。つまり、*Necimwa'nika't* の区域にはかつて月経屋だけでなく、産屋もたてられていた。女性の陰部からの出血が不浄とみなされていたので、月経のみならず、出産のさいの出血も忌避されたのである。そのため、妊婦は *Necimwa'nika't* にいき、産屋で子どもをうんだのち、約20日間そこにとどまらねばならなかった。

族の者とはまったく別の火で料理しなければならない。そのほか、タロイモ田に行くことと特定の魚を食べることもタブーである。ついで、第二日目と第三日目になると、別火のタブーはなくなるが、そのほかのタブーは継続される。第四日目からはタロイモ田にいてもよいが、魚のタブーはまだあと四日間つづく。つまり、月経屋をでてから八日間がすぎて、ようやく普通の女性にもどることができるのである。このような月経の女性に関するタブーがやぶられたならば、嵐や長雨の原因になるといわれる。

女性はまた、月経のほかにも数多くのタブーをまもらなければならない。たとえば、昭和6年から約7年間にわたって、サタワル島に滞在し、数多くの民族誌的記録をのこした故土方久功氏は、女性のタブーの一つについて、つぎのように書き記している。

「彼女らは皆遠くの方から低く地面にしゃがんで、腰巻をおさえおさえにじり寄ってくる。さらに遅れて急ぐ者はほとんど地を四這いになってくる。この島では女たちは男のまえではまっすぐに立って歩いてはならないからである。それは、実に不思議な光景で、このような集まりの時、一団の女たちがいちようにしゃがんで家鴨のように一足一足と身体の向きを変えようにして歩くところは、何か大きな芋虫でも這っているような、人間ばなれのした感をおこさせる」[土方 1974: 51]。

土方氏が記録したのは、*yo'ppworo* とよばれるタブーである。これは、人の前で相手に対して、腰をまげたり、身体をかがめて敬意を表さねばならない行動を意味している [須藤 1980: 1028-1032]。とくに、女性は自分の *mwengeya'ng* (異性キョウダイ) に対して、このような表敬行動をとらねばならない。*mwengeya'ng* のカテゴリーには、日本でいうところの兄弟のほかに、従兄弟や又従兄弟などもふくまれる。そのほか、女性は自分の異性キョウダイの食べ残しをたべても、持ち物に手をふれても、寝具類にさわってもいけない、とされている。また、女性は異性のキョウダイに対してつかってはならない言葉のタブーもある。このように、女性は異性のキョウダイに対して数々の立居振舞に関するタブーを課せられていた¹²⁾。

ところが、カトリック教会の神父は男女の平等を説き、男尊女卑型の社会的タブーは廃止されるべきことを主張した。男性はそのような説教をまったく無視したが、女性はしだいに男女平等を説く、神父の教えに耳を傾けるようになった。

(3) 伝統宗教における中心と周縁

月経の女性が社会的に排除の対象となり隔離されるのは、宗教的職能者である *so'wrong* との接触をさけるためである。このような *so'wrong* と月経の女性の関係は、

12) 男性も、自分の異性キョウダイに対して同様のタブーをまもらねばならないが、女性の方がはるかに厳しくタブーの遵守がもとめられた。

サタワル島における特殊な属性をもつ人間の対立関係を象徴している。

so'w という接頭語は、普通人とは異なる特殊な技能をもつ専門家に対してもちいられ、しかも主として普通人より優れた技能をもつ者に限定されている。たとえば、*so'wsa'fey* (呪薬の専門家)、*so'wrhe'* (マッサージの専門家)、*so'wpwe* (数占いの専門家)、*so'wyu'ru'u'r* (日和見の専門家)、*so'wpwiin* (竿釣りの専門家) などである。つまり、*so'w* というカテゴリーで徴づけられた人間は、特定の分野で普通人よりも優れた能力があるとみとめられ、社会的にプラスの評価があたえられているといえる。とくに、*so'wrong* の場合には、超人間的靈力を身につけているとみなされており、また危機のさいに儀礼を主宰するので社会的に尊敬の対象になっている。

それに対して、月経の女性は *manipeyita'keno'* とよばれ、*maan* というカテゴリーに分類される。そのほか、*maan* というカテゴリーに分類される人間には、つぎのような人々がいる。たとえば、*manisemwaay* (病人)、*manimmang* (精神異常者)、*manikon* (新生児)、*manipwoopwo* (妊婦)、*manima'* (死者) などである。*maan* という概念は本来、多義的である [秋道 1981: 73-75]。第一に、*maan* は「人間を含めた動物の総称」であり、この場合には *miin* (無生物) と対立する。第二に、*maan* は「人間以外の動物の総称」であり、この場合には *yaremas* (人間) と対立する。第三に、*maan* は「特殊な属性をもった人間」を意味する場合がある。そのさいには、*maan*+**X** (**X** はその人間の特殊な属性を意味する語) という形で表現される。たとえば、月経の女性は *maan*+*peyita'keno'* (月経) と表現されるわけである。このように、*maan* のカテゴリーの人間は、*yaremas* (人間) であるにもかかわらず、*maan* (動物) と同じカテゴリーでとらえられており、そういう意味において両義性をになっているといえる。いずれにしても、*maan* のカテゴリーで徴づけられた人間は、普通人と異なる特殊な属性をもつとみなされており、しかも病人や精神異常者などのように、なにかが損なわれた特殊な人間に限定されている。換言するならば、*maan* というカテゴリーの人間は、社会的にマイナスの評価があたえられているといえる。とくに、月経の女性の場合には、*maan* のカテゴリーの人間のなかで、もっともマイナスの評価をうけており、居住区から排除される対象になっている。

ところが、社会的にもっともプラスの評価をうける *so'wrong* は、マイナスの評価をうける月経の女性を忌避しなければならない。これを「中心」と「周縁」の概念で解釈すると、興味深い点がかびあがる。*so'wrong* は、危機の克服において中心的役割をはたしており、また社会的にもっともプラスの評価をうけているので、サタワル社会の「中心」に位置する存在とみなせる。それに対して、月経の女性は、危機の

原因になりやすいために社会的に排除され、もっともマイナスの評価をうけているので、サタワル社会の「周縁」に位置づけられた存在といえる。ところが、*so'wrong* は月経の女性をきびしく忌避しなければならず、もしもなんらかの関わりをもったならば呪力を失なうといわれる。つまり、「中心」(*so'wrong*) はつねに、「周縁」(月経の女)によって脅かされているのである。*so'wrong* は秘密の知識を独占し、根源的な力を秘めた女性を「周縁」におしやることによって「中心」に位置するが、その一方でつねに「周縁」に脅かされるという、「中心」と「周縁」の弁証法的関係が生じている。

伝統宗教の中心に位置づけられる *so'wrong* はまた、社会的にもっとも恐れられる存在でもある。秘儀的知識の体系である *roong* は危機克服において重要な役割をはたすが、その一方で *roong* はまた、人々に「病い」や「死」などの不幸をもたらす邪術としての要素も色濃くふくんでいる。そのため、人々は *so'wrong* によって邪術をかけられることを恐れたのである。しかし、キリスト教に改宗することによって、キリスト教の神である *Teewus* が人々を邪術からまもってくると信じられたため、*so'wrong* に対する恐れから解放されることになった。そのような社会的要因もまた、改宗において重要な役割をはたしたといえる。

2. 政治的要因

(1) ヤップ帝国

サタワル島では、女性の方がいち早くキリスト教に興味をしめしたのに対して、男性は当初、カトリック教会の神父の説教をまったく無視した。ところが、最終的に男性もふくめて、島をあげて集団改宗にふみきった背景には、政治的要因が重要な役割をはたしている。

集団改宗にいたった政治的要因を理解するためには、サタワル島をふくめたヤップ島の離島における政治的状況の把握が必要である。これらの離島の島々はかつて、ヤップ島ガギル (*Gagil*) 管区のカチャパル (*Gachpar*) 村およびオネヤン (*Wanyan*) 村に政治的・経済的・宗教的に従属し、それらの両村を頂点とする政治的ヒエラルキーにもとづく朝貢関係を保持していた。*Lessa* は、このような政治形態をいささか大袈裟に「ヤップ帝国」(*Yap Empire*) と命名している [*LESSA* 1950: 42]。ヤップ島の東方の島々は数年に一度、かならず各種の貢物をヤップ島の首長にとどけて、友好関係を維持しようとした。このような朝貢関係は *sawai* とよばれており、ヤップ島を頂点とする政治的ヒエラルキーを確認するためのものであった。ヤップ島が最高位で

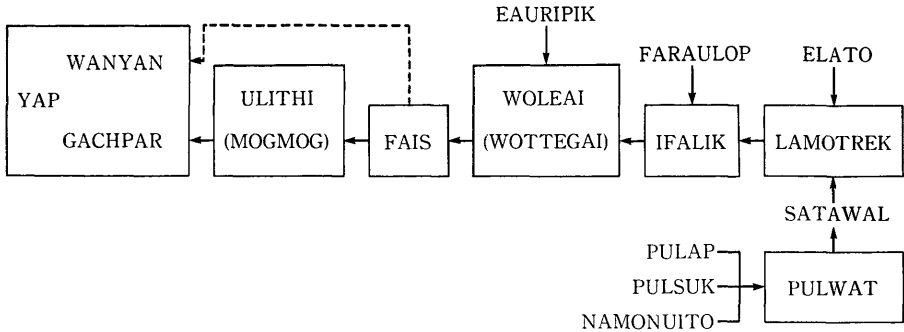


図1 ヤップ島の離島における政治的従属関係
(牛島 [1987: 303] の原図をもとに作成)

あり、それから東方にいくにしたがって下位に従属していく (図1 参照)。このような政治的ヒエラルキーからすると、ウリシー環礁はヤップ島について、第二位の政治的地位にあり、しかも離島のなかでは最高位を占めている。そのため、ウリシー環礁の首長は、離島全体をとりしきる立場にあった。それに対して、かなり東方のサタワル島ははるかに低い政治的地位にあった¹³⁾。要するに、離島のうちで最高位の島から助祭が派遣され、下位にあるサタワル島は政治的圧力のもとで、改宗を検討させられたのである。

このようなヤップ島の離島における政治的従属関係のうちで、サタワル島の集団改宗に、とくに重要な影響をあたえたのは、つぎの2点である。一つは、サタワル島とウリシー環礁との関係、もう一つはサタワル島と西隣りのラモトレック環礁との関係である。

まずはじめに、サタワル島とウリシー環礁との政治的従属関係をみってみる。すでにのべたように、ウリシー環礁は、いわゆる「ヤップ帝国」における第2位の地位をしめ、さらに離島において最高位の政治的地位をもって君臨する。「ヤップ帝国」においては、ヤップ島から東方にいくにしたがって、政治的に劣位におかれる。そのため、かつては東方の離島の島々は定期的貢納物をもって大きな船団をなしてヤップ島に朝貢にむかった。そのさいに、かならずウリシー環礁のモグモグ (Mogmog) 島に立寄り、離島の大首長に対して、各種の貢納物をさしだしたのち、ウリシー環礁の代表を先頭にヤップ島のガチャパル村およびオネヤン村にむかった。このように、ウリシー環礁はヤップ島と離島の各島の仲介役であるとともに、政治的に離島に君臨した。

13) sawai とよばれるヤップ島の離島における政治的・経済的・宗教的關係については、牛島が詳細に分析している [牛島 1987]。また、アメリカの人類学者による研究としては、つぎを参照 [ALKIRE 1980; LESSA 1950]。

このような「ヤップ帝国」とよばれる政治的な従属関係がキリスト教への改宗にはたした役割をみると、一つの明確な事実がうかびあがる。それは、政治的地位の上位の島から順番に、キリスト教への改宗がなされた点である。ヤップ島では、1886年から本格的な布教がはじまり、19世紀末には、かなりの人々がキリスト教に改宗していた。離島で最上位の政治的地位にあるウリシー環礁では、ほかの島々に先駆けて、1930年代から改宗がはじまった。そのうち、1950年代になってから、ウリシー環礁の東方の政治的に下位の島々において、キリスト教への改宗がおこなわれた。そのさいに、ウリシー環礁の指導のもとに、先にキリスト教に改宗した政治上位の島が、近隣の政治的下位の島における改宗に圧力をかけている点が注目される。サタワル島の場合には、1953年に、ラモトレック環礁における集団改宗を指導したウリシー環礁の2人の助祭が、ひきつづいてサタワル島をおとずれ、集団改宗を指導した。約2カ月間、サタワル島に滞在して、説教をおこない、最終的に集団改宗にみちびいた。そのさいに、すでに改宗していたラモトレック環礁の人々が同行したといわれている。太平洋戦争後におけるアメリカ海軍従軍神父による布教にはほとんど関心をしめさなかったサタワル島の首長と男性たちは、政治的に上位のウリシー環礁から派遣されてきた2人の助祭を無視することができず、また近隣で政治的に上位のラモトレック環礁がすでに集団改宗をおこなったという事実をつきつけられて、真剣に討議をかさねた結果、1953年に島をあげてのカトリック教会への集団改宗を決定した。

(2) 政治的優位性とキリスト教

ウリシー環礁との関係とともに、ラモトレック環礁との政治的従属関係もまた、サタワル島における集団改宗に大きな影響をあたえた。サタワル島とラモトレック環礁およびその近隣のエラート (Elato) 環礁は、*ha* (「釣り針」の意) とよばれる政治的従属関係を構成する [牛島 1987: 283-286]。これらの3島のうちで、ラモトレック環礁は「首長の島」とみなされ、サタワル島とエラート環礁はそれに従属する。それはしばしば、アウトリガ・カヌーに例えられることが多い。ラモトレック環礁はカヌーの本体、サタワル島はアウトリガ部分の浮木、エラート環礁はアウトリガの反対側の荷台を象徴する。「主島」のラモトレック環礁を中心に、3島で1隻のカヌーを構成するわけである。そして、「属島」のサタワル島とエラート環礁は、毎年2回、定期的に「主島」のラモトレック環礁へ貢納物をとどけねばならない。貢納物は、主としてココヤシの実や *maar* とよばれるパンノキの実の保存食などであった。それに対して、ラモトレック環礁の首長は自らが管理権を有する無人島およびその周辺のサンゴ礁を「属島」の住民が使用することをみとめるとともに、「属島」が台風などの

被害をうけ食料危機に陥ったときには援助物資をおくる。

このような島嶼間の政治的従属関係が、サタワル島におけるキリスト教への集団改宗にあたえた影響として、まずはじめに「主島」のラモトレック環礁がサタワル島に先立って集団改宗をおこなった点が指摘できる。ラモトレック環礁では、太平洋戦争前の日本統治時代に外国人神父が島に滞在していたといわれており、また戦後におけるアメリカ海軍従軍神父による布教活動によって、1950年頃には少なくとも25人ほどの島人がキリスト教に改宗していたといわれている [ALKIRE 1965: 166]。そのため、ラモトレック環礁を訪問したサタワル島の人々のうち、数人がラモトレック環礁で外国人神父の説教をきいている。最終的に、1953年になって、ラモトレック環礁においてカトリック教会への集団改宗が決定されたが、そのさいにウリシー環礁から派遣されてきた2人の助祭が大きな役割をはたした。ラモトレック環礁における集団改宗にひきつづいて、ウリシー環礁の助祭がラモトレック環礁の島人とともにサタワル島をおとずれ、サタワル島における集団改宗を指導した。近隣の「主島」であるラモトレック環礁が集団改宗を執行したという事実が、サタワル島の人々にあたえた影響ははかりしれないものがあった。

ここで、サタワル島内の政治的関係を取りあげると、島外における場合とまったく同様の現象がみられる。サタワル島には、8つの clan (*ya'yinang*) があるが、そのうち3つの clan は「首長 clan」であり、残りの5つは「平民 clan」である。キリスト教への改宗のさいに、「首長 clan」の人々は「平民 clan」に先がけてキリスト教受容に傾き、「平民 clan」の人々を説得したといわれる。島外においても、政治的に上位にある島が下位の島を指導したように、島内においても政治的に上位の clan が下位の clan を説得したわけである。島外におけるのと同様に、島内においても政治的優位性とキリスト教との関連性が顕著といえる。「首長 clan」が「平民 clan」に先がけて改宗に傾いたのは、かれらの方が近隣の島々と、clan の系譜の点でより親密な関係にあるためである。サタワル島の「首長 clan」の祖先は、西隣のラモトレック環礁から移住してきたといわれているのに対して、「平民 clan」は東方から移住してきた clan であり、政治的に服従をしいられたといわれている [須藤 1984: 223]。

いずれにしても、サタワル島の女性たちのあいだでは、すでにキリスト教をうけられる下地ができていたところに、タイミングよく政治的圧力がかかり、男性たちは熟慮の末、集団改宗を決意したのである。サタワル島をとりまく他島との政治的従属関係がキリスト教への集団改宗に多大の影響をあたえたといえる。

3. 宗教的要因

(1) タブーと神々

サタワル島における集団改宗の要因として、これまで社会的要因と政治的要因についてみてきた。社会的要因としては、男女の平等を説くキリストの教えが、社会的に差別されていた女性にうけいれやすかったことである。そして、政治的要因としては、政治的地位の高い島からの圧力が男性たちに集団改宗にふみきらせる弾みになったことである。しかし、このような社会的・政治的要因によってのみ、集団改宗が可能になったのではない。宗教的要因ももちろん、深く関与している。

そのうちでもっとも重要な要因は、伝統的な神々に対する「恐れ」であった。故土方久功氏は、「島の人々が神々をきわめて恐れている」とのべたのちに、つぎのようにかきしるしている。「人々の信仰でもっとも注意すべきはこの狂信と恐れである。その恐れはほとんど絶対的なもので、積極的な信仰、すなわち幸福、幸運を祈るということよりも、彼らにとってはこの恐れを除くということが第一願目なのである。だから神話などに物語られる祖先神とか理想神とかの多くの善神たちはほとんど顧みられないで、この恐れの対象であるところのもののみが関心をもたれるのである」[土方 1974: 326]。

かつてのサタワル島の人々は、さまざまな伝統的神々 (*yanu'*) とともに生きていた。それらの *yanu'* は大別すると、2種類にわけられる。一つは、人間に幸いをもたらす善神としての *yanu'fir* (「神」・「善い」の意) であり、もう一つは人間に災いをもたらす悪神としての *yanu'pwut* (「神」・「悪い」の意) である。しかしながら、*yanu'fir* といえども、つねに人間に対して寛容かという、決してそうではない。たとえば、パンノキの神である *Yanu'nu'ma'a'y* (「神」・「パンノキ」の意) は、人間にパンノキの実をもたらす善神であるが、人間がパンノキに関するタブーをやぶった場合には、その人間に対して天罰として病いをひきおこすこともある。そういう意味で、サタワル島の *yanu'* は両義性を有していたといえる。

島の人々が、各種の *yanu'* を恐れたのは、それらが「病い」や「飢え」や「天災」や「事故」などの各種の危機をひきおこすとみなされていたからである [石森 1985a, 1985b]。そのために、サタワル島の社会生活において、人々は数多くのタブーをまもらねばならなかった。衣食住に関するタブーをはじめとして、時間や空間に関するタブー、仕事に関するタブー、セックスに関するタブー、月経や出産に関するタブー、死に関するタブー、病気に関するタブー、言葉に関するタブー、立居振舞に関するタブー、火に関するタブーなど、ありとあらゆるタブーがあり、人間の行動を規制して

いた。yanu' に対する恐れのために、人々はタブーをまもったのである。

キリスト教に改宗以前の段階において、島の人々は数多くの神々とタブーの体系を遵守しながら社会生活をおくらねばならなかった。ところが、カトリック教会の神父は、唯一絶対神である Teewus を信じるならば、他のすべての伝統的な神々を信じる必要がないと説いた。また、Teewus は人間にとって、つねに善なる神であり、いっさいのタブーが不要と説いた。

しかし、恐ろしい yanu' たちと決別し、新しい神である Teewus の力を信じるには、大いなる決断を必要とした。伝統的な神々によって人間に課せられた各種のタブーを遵守しなければ、かならず天罰がくだり、病いや飢えなどの危機が生じると信じられていたからである。そのため、伝統的な神々からキリスト教の神である Teewus にのりかえるにあたって、人々は悩み苦しんだはずである。そのさいに、すでにキリスト教に改宗していたウリシー環礁やラモトレック環礁の人々の説得が重要な役割をはたした。伝統的な神々をすて、各種のタブーを遵守しなくても、病いや飢えなどの危機が発生しないということを、ウリシー環礁から派遣されてきた2人の助祭がくりかえし説得した。最終的に、集団改宗が決断されるとともに、各種のタブーが意図的に侵犯された。月経屋が破壊され、聖地が侵犯され、タブーの食物が食された。しかし、危機発生危険性のなかで、幸いにも病いや飢えなどが発生しなかった。それによって、Teewus の神聖な力が証明されたといえる。

(2) 危機対応の多元性

キリスト教改宗以前には、病いや飢えなどの各種の危機が、さまざまな yanu' によってひきおこされるとみなされていた。そして、危機が発生すると、危機原因になっている yanu' を類推するために占いをおこなったのちに、各種の秘儀的知識の体系である roong をもちいて、危機克服がはかられた。そのさいに、宗教的職能者である so'wrong が各種の儀礼を主宰し、中心的役割をはたした。

病いや飢えなどの危機にかぎらず、カヌーづくりや遠洋航海やタロイモ農耕などをはじめとして、人間がおこなう主要な活動にはつねに yanu' が関与していると思われていたので、so'wrong 抜きには何事もなされなかった。そのため、so'wrong は社会的に重要な役割をはたすことができた。しかし、roong の修得には長い年月と多大の謝礼を必要とした。また、so'wrong は基本的に男性しかならず、女性は主要な儀礼のさいには排除され、宗教面での男性優位が顕著であった。

ところが、カトリック教会の神父は roong を否定し、病いや飢えなどの危機は悪魔である Sa'a'tan によってひきおこされるので、Teewus に祈りをささげることによ

って、かならず救われると説いた。Sa'a'tan は、悪神や悪霊や悪魔など、各種の災いをもたらす超人間的存在を包括的に意味する概念である。この考えにしたがうならば、もはや *so'wrong* に依頼して各種の儀礼をおこなって、危機克服をはからなくても、キリスト教会にでむいて、各自が Teewus に祈りをささげれば事足りる。従来のような各種の *roong* をもちいての多元的な危機対応に対して、キリスト教を信じることによって危機対応の一元化がなされるわけである。つまり、キリスト教への改宗によって、危機対応の合理化が実現できるわけである [石森 1985a]。

IV. 集団改宗にともなう文化変化

1. 多神論から一神論へ

サタワル島におけるキリスト教への集団改宗にともなって、さまざまな社会的・文化的変化が生じた。そのなかでまずはじめに指摘しなければならないのは、「多神論の世界」から「一神論の世界」への移行にともなう変化である。改宗以前のサタワル島においては、*yanu'* と総称される超人間的存在もしくは超自然的存在を抜きにして人間の生活は成り立たなかった。キリスト教に改宗したことによって、Teewus が唯一絶対神として信仰されることになり、*yanu'* の存在が否定された。かつての伝統的の神々は善神 (*yanu'fir*) といえども、人間がタブーを順守しない場合には、タブーを犯した人間に病いをひきおこすこともありうる両義的存在であった。しかし、キリスト教の神である Teewus はつねに善なる神であった。一方、人間に災いをもたらす悪神・悪霊 (*yanu'pwut*) は、Sa'a'tan とみなされた。

キリスト教の神である Teewus は、サタワル島の人々にとって、まったく新しい神である。しかし、島の人々は、Nuka'yina'ng (「中央」・「天」の意) とよばれる伝統的な神を Teewus として理解しようとした。Nuka'yina'ng は天上世界にすむ、いわば「天御中主神」といえる存在である。神話でかたられるだけで、日常生活にはほとんど登場しない神であるが、最高神としての性格をもつために、Teewus と同一視されたのである。また、一部の人々は、伝統的な神である Yanu'nap (「神」・「大きい」の意) を Teewus として理解しようとした。Yanu'nap は、天上世界にすむ、いわば「大御神」といえる存在であり、神話によると Nuka'yina'ng の父親といわれる最高神である。その場合には、Nuka'yina'ng がイエス・キリスト (Yeesus Kirhistu's) とみなされた。しかし、サタワル島には、カトリック教会の神父が常駐していないので、神学教育が十分になされていないために、島のすべての人々に共有されるほど明

確なキリスト教神学は存在しない。いずれにしても、サタワル島の人々は、新しい神である Teewus を、伝統的な神々との関わりで理解しようところみたのである。

一神教への移行によって伝統的神々が否定されたのにもなって、各種のタブーが廃止された。タブーは伝統的神々によって人間に課せられた聖なる規範とされ、それらを侵犯すれば病いや飢えなどの危機が生じるという、恐れのために社会統制力もちえた。しかし、伝統的な神々の存在が否定され、悪神・悪霊 (*yanu'pwut*) に対する恐れがなくなったことによって、各種のタブーが放棄されることになった。

2. 天国と地獄の観念

キリスト教への改宗で生じたコスモロジーの変化で、もう一つ注目すべきことは、「天国」と「地獄」の観念である。島の人々はかつて3つの世界を認識していた。それらは、*weyina'ng* (「上」・「天」) とよばれる「天上世界」、*weyiso'o'n* (「上」・「地面」) もしくは *fa'a'yina'ng* (「下」・「天」) とよばれる「地上世界」、*fa'a'yino'nn* (「下」・「海中」) とよばれる「海底下世界」などである。キリスト教改宗後には、「天国」や「地獄」という観念が導入されるとともに、前者が「天上世界」とむすびつけられ、後者が「海底下世界」とむすびつけられた。

「天国」については、キリスト教への改宗以前から伝統的に観念されていた。人間の霊魂は、死後4日間、地上世界にとどまったのちに、天上世界にカヌーでのぼっていく。天上世界にも、地上世界と同じように島と海があるが、死者の霊魂は *Fatu'manu* とよばれる島にいき、そこで暮すといわれている。その島では、仕事をしなくても食物が簡単に手にはいり、また生のままたべられるので料理が不要である。そういう意味で、「天国」と観念されていたといえる。ただし、すべての死者の霊魂が *Fatu'manu* にはいれるのではなく、生前にタブーを数多く犯した人間の霊魂は「天国」の番人である特定の神によって追いつ返される。その場合には、その霊魂はふたたび地上世界にまいもどって、人間に病いや飢えなどの災いをもたらす悪霊 (*yanu'pwut*) になるといわれる。このような *Fatu'manu* に象徴される「天国」の観念が、キリスト教改宗以前から認識されていたために、キリスト教がもたらした「天国」の観念はうけいれやすかったといえる。

それに対して、「地獄」の観念は、キリスト教によって新たに導入されたものである。現在、島の人々は2種類の「地獄」を観念している。一つは、*Nifiyeereno* とよばれるものであり、もう一つは、*Purugatorio* とよばれるものである。前者は、激しく燃えさかる焔に象徴される紅蓮地獄であり、後者は、より小さい焔の地獄といわれ

る。これらはともに、スペイン語からの借用語であり、前者は *infierno*、後者は *purgatorio* に由来する。キリスト教神学では、*infierno* は「地獄」であり、*purgatorio* は「煉獄」とされ、明確に区別されている [ル・ゴッフ 1988]。「地獄」は「天国」と対比され、生前に罪をおかした悪人の靈魂が死後にいくところであるのに対して、「天国」は善をなした人間の靈魂がいくところとされている。「天国」と「地獄」に対して、「煉獄」はそれらの中間に位置づけられており、それほどの善もなせず、またそれほどの悪もなさなかった人間の靈魂のいくところとされている。サタワル島の人々は、「地獄」と「天国」の違いを、人間が生前に犯した「罪」の大小に対応させている。キリスト教によって導入された「罪」の観念は、*ttipis* とよばれ、つぎのようなものが該当する。たとえば、殺人、暴行、窃盗、詐欺、姦淫、貪欲などから、教会にいかないこと、他者に物をあたえないこと、日曜日に仕事をするなどが、*ttipis* と観念されている。これらの「罪」を犯した人間の靈魂は、その「罪」の大小に応じて、死後に2つの地獄のどちらかにおくられる。より多くの大きな「罪」を犯した人間の靈魂は *Nifiyeereno* にいき、小さな「罪」を数多く犯した人間の靈魂は *Purugatorio* にいくといわれる。

キリスト教改宗以前には、各種のタブーや伝統的の神々に対する「恐れ」が、社会統制の役割をはたしてきたのに対して、改宗後には、「罪」と「地獄」の観念が導入され、社会統制において重要な役割をはたすようになった。しかし、タブーの侵犯によって生じるとみなされた病いや飢えなどの危機は現世的な天罰であったのに対して、「罪」や「地獄」の観念は来世的な天罰であり、日常生活における社会統制力は弱いようである。かつての伝統的の神々に対する恐れにもとづくタブーの体系の方が、より強力な社会統制力をもちえたといえる。

葬送のあり方もまた、キリスト教への改宗によって、大きな変化をこうむった。サタワル島では、かつて2種類の葬送のやり方があった。それは、「悪い死」という観念とむすびついていた。「悪い死」とは、事故死、自殺死、他殺死、死産、出産死、2才未満の子どもの死、長患いの後の病死などである。「悪い死」で亡くなった死者の靈魂は天上世界にはいることができずに、悪霊 (*yanu'pwut*) となり、地上世界にまいもどって人間に災いをもたらす存在になる。そのため、かつては「悪い死」による死者はかならず、海で「水葬」にされた。島の西方の一定の海域に、石などをくりつけた死者をしずめて、「海底下世界」におくりこもうとした。それによって、「地上世界」に舞いもどらないように封じ込めようとしたのである。キリスト教によって導入された「地獄」を「海底下世界」と観念するのは、「悪い死」による死者を水葬に

よって「海底下世界」に葬る伝統的観念と関連するのかもしれない。

3. 秘儀的知識の喪失

キリスト教を受容したことによって、伝統的の神々が否定されたので、それにとまって秘儀的知識体系である約40種類の *roong* もまた社会的にもちいられなくなった。*roong* は、人間が特定の伝統的の神々の助力を得ようとするさいにもちいられる秘儀的知識であったが、キリスト教に改宗後は不要になった。

かつては病いや飢えなどの危機にさいして、*roong* を修得した *so'wrong* が儀礼をおこない、危機克服に貢献した。しかし、カトリック教会の神父は *so'wrong* が儀礼をおこなうことを厳しく戒めた。とくに、呪文をもちいることは厳禁とされた。なぜならば、呪文は伝統的な神々とコミュニケーションをはかるための手段であり、唯一絶対神を信じるキリスト者には不要とみなされ厳禁されたのである。かつては危機の種類に応じて、約40種類の秘儀的知識の体系が活用され、危機対応のあり方が多元化されていた。しかし、それらが否定されたことによって、危機にさいしてもただ単にキリスト教会にでかけて、各自が *Teewus* に祈りをささげることによって、神の加護をうけられるようになった。つまり、キリスト教の受容によって、「危機対応の一元化」がはかられ、「危機対応の合理化」がすすめられたといえる。

秘儀的知識の体系としての *roong* はかつて、病いや飢えなどの危機克服にさいして重要な役割をはたしたが、太平洋戦争後における近代化のなかで、危機のあり方が大きく変化した点も見逃せない。たとえば、戦後において、サタワル島にも小さな診療所が設立され、近代医学の初歩をまなんだ衛生夫もしくは保健夫が常駐している。また、ヤップ島には近代的病院があるし、2か月に一度の割合で離島をめぐる連絡船には、かならず医者が同行しており、巡回医療をおこなっている。かつてのように、*roong* に頼らなくても、近代医学によって「病い」の治療がおこなわれるようになった。そして、台風などの被害によって「飢え」が生じた場合には、ただちに連絡船によって救援物資がとどけられるようになった。近代化がすすむにつれて、*roong* にたよることなく危機の克服が可能になったといえる。つまり、「危機対応の世俗化」がはかられつつあるといえる。

キリスト教に改宗したことによって、*roong* は社会的にもちいられなくなったが、*roong* のすべてが消え去ったわけではない。秘儀的知識の体系としての *roong* は、さまざまな知識を内包している。たとえば、特定の伝統的の神々に関する神話や呪文、各種の儀礼のやり方、呪薬の作り方、カヌーづくりをはじめとする各種の技術など、言

語的知識ならびに非言語的知識を内包する。伝統的神々と直接関わる知識内容である神話や呪文などは、カトリック教会の神父によって否定されたが、カヌーづくりなどの技術に関する知識内容は、改宗後もひきつづき社会的にもちいられた。それらの技術を列挙すると、つぎのとおりである。カヌーづくり、航海術、数占い、転覆カヌーの復元、護身術、カヌー庫の修理などである。これらの技術は本来、*roong* の一部を構成し、それをもちいるさいにはかならず儀礼をおこなうことが不可欠であった。たとえば、カヌーづくりをおこなうさいには、カヌーづくりを司る伝統的な神の助力を必要とするので、パンノキの切り出しからはじまって、各工程で儀礼をいとなみ、呪文をとえねばならなかった。航海術の場合にも、島をでてから島にかえてくるまでのあいだに、航海の神である *Yanu'nu'wa'yi* (「神」・「遠洋航海」) の加護を必要としたので、各種の儀礼をおこない、呪文をとえねることが必要であった。ところが、キリスト教に改宗したことによって、儀礼がおこなわれなくなり、神事抜きで技術のみが生き残ったといえる。

roong はかつて、危機克服においてもっとも重要な役割をはたしていたが、その一方で、*roong* はまた、「病い」や「飢え」などの災いをうみだす邪術としての要素もふくんでいたために、人々に畏怖された。そのような意味において、*roong* は人間に幸いをもたらすだけでなく、災いをもたらしかねないという、両義的な属性をもつ知識体系であった。ところが、キリスト教の受容によって、邪術としての *roong* という、反社会的な側面もあわせて否定される結果となった。

4. 社会関係の変化

キリスト教受容にともなって社会関係の面でもさまざまな変化が生じた。そのなかでもっとも注目すべき点は、男女関係の変化である。それは、月経屋の廃止に象徴的にしめされている。月経中の女性は不浄とみなされ、社会的に特別区域に隔離されていたが、改宗にともなって月経屋の制度が廃止された。それとともに、月経終了後の各種のタブーも廃止された。月経屋の制度を必要としたのは、既述のとおり、秘儀的知識の専門家である *so'wrong* が月経の女性を不浄として厳しく忌避したためである。しかし、キリスト教への改宗にともなって、秘儀的知識が社会的にもちいられなくなったことによって、月経屋の制度もまた撤廃された。

so'wrong は、キリスト教以前の伝統宗教において、中心的役割をはたしてきた存在であった。それに対して、月経の女性は不浄とみなされて隔離され、社会的に周縁に位置づけられた存在であった。いわば、*so'wrong* は伝統宗教における「中心」の象徴

であり、月経の女性は「周縁」の象徴であった。*so'wrong* は社会的に重要な秘儀的知識の体系を独占することによって、伝統宗教における「中心」に位置し、月経の女性を不浄とみなして「周縁」におしやる。しかし、「周縁」に位置する月経の女性は *so'wrong* の呪力を無効にできるほどの根源的な力を秘めており、「中心」はつねに「周縁」によって脅かされるという、「中心」と「周縁」の弁証法的関係が顕著にみられた。ところが、キリスト教改宗にともなって、このような宗教における「中心」と「周縁」の関係が消滅したといえる。

伝統宗教の「中心」に位置していた *so'wrong* は、危機克服において重要な役割をはたすために、社会的にもっとも尊敬される存在であったが、その一方で災いをうみだす邪術としての *roong* の修得者でもあり、反社会的性格もあわせもっていたために、もっとも恐れられる存在であった。いずれにしても、*so'wrong* は伝統宗教の中心に君臨していたが、キリスト教の受容によって *roong* が否定されたことによって、中心性を喪失した。キリスト教に改宗後は、本来であれば、神父がかつての *so'wrong* にかわって宗教の分野における「中心」に位置されるはずであるが、サタワル島には神父がいないので、日常的には「中心」を欠くかたちでキリスト教信仰がなされている。ヤップ島の離島において、政治的に最高位に位置づけられるウリシー環礁にのみ神父が常駐しており、2カ月に一度の割で離島に連絡船がでるさいに、その神父が船ののって島々を巡回する。各島では、神父の来訪をまって、子どもの洗礼や結婚式などをまとめておこなう。そのような意味においても、ウリシー環礁はいまだに、宗教的にも離島の島々に君臨しているといえる。

そのほか、キリスト教への改宗にともなって、男女関係における差別的な各種のタブーも廃止された。たとえば、かつては女性は異性キョウダイに対して、頭を低くして敬意を表する *yo'ppworo* とよばれる表敬行動をとらねばならなかったが、改宗後にはそのような習慣が廃止された。カトリック教会の神父が、男女の平等を説いたからである。そのほか、女性が異性キョウダイに対して尊敬語をつかわねばならないとか、異性キョウダイの食べ残しをたべても、持ち物にふれてもいけないなどのタブーもまもられなくなった。ただし、これらのタブーはキリスト教に改宗後、数年間は無視されたが、男女関係が乱れたために、首長たちが検討した結果、ふたたび復活している。

そのほか、カトリック教会の信者になったことによって、離婚がみとめられなくなった点も、社会関係に重要な変化をもたらした。かつては離婚が簡単にみとめられており、改宗以前には数多くの人々が少なくとも2～3回は離婚を経験していた。とこ

ろが、改宗後は基本的に離婚がみとめられないので、男女関係における柔軟な付き合いに大きな変化が生じた。

V. お わ り に

キリスト教への集団改宗は、多様な伝統的神々の世界から唯一絶対神の世界への移行を意味していた。それは「信仰の一元化」をうみだし、同時に「危機対応の一元化」をもたらした。かつては、「病い」や「飢え」などの各種の危機に対応するために、さまざまな秘儀的知識がもちいられ、危機対応のあり方が多元化していた。ところが、キリスト教への改宗によって伝統的な神々と決別するとともに、秘儀的知識の体系としての *roong* と決別したことによって、教会にいてキリスト教の神である *Teewus* に祈りをささげるだけになった。

その一方で、「危機対応の世俗化」がすすみ、宗教に頼ることなく、危機の克服がはかれつつある。たとえば、病人がでると、島の衛生夫が薬品を投与したり、注射をうって病いの治療をおこなう。そのさいに、無線でヤップ島の病院をよびだし、医師の指示をうけることもある。重病人がでた場合には、無線で連絡船をよび、ヤップ島の病院に入院させる。そこでも処置できない場合には、グアムやハワイの病院まで空輸して手術をうけさせる。そのほか、遠洋航海にでかけるときには、磁気コンパスやラジオや携帯用無線機をカヌーにつみこみ、事故などの危機を未然に回避しようとしている。さらに、嵐などの天災についても、ラジオ放送やヤップ島からの無線連絡によって、台風情報がとどくようになり、以前のような恐怖感がなくなりつつある。そして、台風などの被害によって飢えが発生しても無線通信でヤップ島の役所に連絡して、救援物資をおくってもらうことができる。近代化の進展にともなって、かつて危機と認識された事態の意味合いが変容しつつあるとともに、「危機対応の世俗化」がすすみつつあるといえる。

このような「信仰の一元化」に象徴されるような合理化現象は、宗教の分野だけにきざれるものではない。近代化のプロセスのなかで、同一の現象がそのほかの分野でも顕著にみられる。たとえば、教育の分野においても、「知識の一元化」がはかれつつある。太平洋戦争以前の日本統治時代には、ポナペ島やヤップ島などの主要な島々にだけ、四年制の公学校がもうけられ、離島の島々には学校がなかった。ところが、戦後におけるアメリカ統治時代の始まりとともに、離島にも小・中学校が設置され、義務教育制が導入された。サタワル島にも、小学校と中学校が設立され、現在8

人の教員が教育に従事している。かつては、*roong* の伝授に象徴されるような多元的知識の個人的教育が中心であり、さまざまな知識を個別に修得しなげればならなかった。しかし、学校教育制度の導入によって、アメリカの教科書をもちいた一元的知識の集団的教育がおこなわれるようになり、「知識の一元化」がすすみつつある。また、アメリカの教科書をもちいて学校教育がおこなわれることによって、若い世代が新しい文物をうけいれやすくなり、文化変化の進展が助長された。

同様に、貨幣経済の浸透も「価値基準の一元化」に重要な役割をはたした。サタワル島の人々は、コプラ(ココヤシの果肉を乾燥させたもので、石鹼などの原料になる)を売ることによって、貨幣を獲得し、それをもちいて、各種の物品を購入する。たとえば、米やカンヅメなどの食料品、ナイフや釣針などの雑貨、酒やタバコなどの嗜好品、衣服やラジオや時計や乾電池や石油などの生活必需品を購入する。貨幣という価値基準が登場したことによって、「価値基準の一元化」がすすめられつつある。かつてはいろいろな物事に相対的価値がみとめられていたが、貨幣の登場によって各種の物事が一元的基準で価値づけされはじめている。そのうえ、貨幣さえあれば、新しい物品の入手も可能であり、また子どもをアメリカに留学させることも可能であるため、貨幣そのものに絶対的な価値が付与されはじめている。

このように、キリスト教の受容、学校教育の導入、貨幣経済の浸透などに象徴される近代化によって、かつての多元的な価値体系の世界から一元的な価値体系の世界へと移行しはじめている。しかし、そのような移行が円滑にすすんでいるわけでは決してない。反対に、時計の振り子の揺り戻しのように、近代から伝統への揺り戻し現象が顕著にみられる局面もある。具体的には、秘儀的知識であった *roong* の部分的な復活現象である。とくに、病いの治療に関する *roong* において、その傾向が顕著である。太平洋戦争後に、離島の島々にも小さな診療所がつくられ、近代医学の初歩をまなんだ保健夫が常駐しているが、医療設備の不備と医薬品の不足のために、病いの治療において近代医学が十分にかされてない。そのような状況のなかで、*roong* の復活がみられ、それをかつて修得した人々によって *sa'fey* (呪薬) がつくられて病人にあたえられている。かつての治療儀礼においてはかならず呪文がとなえられたが、呪文はカトリック教会の神父によって厳禁されているので、呪薬のみがあたえられている。サタワル島ではかつて、呪薬はできるだけ数多くの人々によって共飲されることが望ましいとされていた。それによって呪薬のもつ呪力がより強化されるとみなされたからである。そのような伝統的観念は現在でも受け継がれており、病人の親族をはじめとする数多くの人々が呪薬を共飲している。また、サタワル島では現在でも、アウト

リッガ・カヌーによる遠洋航海がなされているが、航海にでたカヌーが島にかえってくるまえに、台風接近のニュースが無線をとおしてとどけられたときに、かつての嵐鎮めの *roong* を修得した老人が島の外れの浜辺にいて、人知れずに呪文をとえ、嵐鎮めの儀礼をおこなったという話をきいたことがある。

サタワル島のような絶海の孤島にも近代化の大波がおしよせつつあるが、現時点では近代化が不完全な形でしか達成されていないために、それによって生じる不備を伝統文化の復活で部分的におぎなっているといえる。伝統と近代のゆらぎのなかで、伝統宗教の核をなした「秘儀的知識」と近代化の象徴といえる「キリスト教」がせめぎあっているわけである。

文 献

秋道智彌

1981 「悪い魚」と「良い魚」——Satawal 島における民族魚類学』『国立民族学博物館研究報告』6(1): 66-133。

ALKIRE, W. H.

1965 *Lamotrek and Their Inter-Island Socio-Economic Ties*. University of Illinois Studies in Anthropology 5, Urbana: University of Illinois Press.

1980 Technical Knowledge and the Evolution of Political Systems in the Central and Western Caroline Islands of Micronesia. *Canadian Journal of Anthropology* 1: 229-237.

青柳真智子

1985 『モデクゲイ——ミクロネシア・パラオの新宗教』新泉社。

BLACK, Peter W.

1978 The Teachings of Father Marino: Christianity on Tobi Atoll. In J. A. Boutilier, D. T. Hughes and S. W. Tiffany (eds.), *Mission, Church, and Sect in Oceania*, Ann Arbor: University of Michigan Press, pp. 307-354.

BOUTILIER, J. A., D. T. HUGHES and S. W. TIFFANY (eds.)

1978 *Mission, Church, and Sect in Oceania*. ASAO Monograph 6, Ann Arbor: University of Michigan Press.

BURROWS, G. and M. SPIRO

1957 *An Atoll Culture: Ethnography of Ifaluk in the Central Carolines*. New Haven: HRAF Press.

FIRTH, Raymond

1967 *The Work of the Gods in Tikopia*. London School of Economics Monographs on Social Anthropology 1 and 2, London: The Athlone Press.

1970 *Rank and Religion in Tikopia: A Study in Polynesian Paganism and Conversion to Christianity*. London: George Allen and Unwin.

橋本和也

1986 「キリスト教と他界観——フィジーにおけるキリスト教受容のドラマをめぐって」『年報人間科学』7: 83-102。

1987 「フィジー人とキリスト教——キリスト教活動の実状とフィジー人のアイデンティティ」『年報人間科学』8: 145-163。

HEZEL, Francis X.

1970 Catholic Missions in the Caroline and Marshall Islands: A Survey of Historical Materials. *Journal of Pacific History* 5: 213-227.

- 1978 Indigenization As a Missionary Goal in the Caroline and Marshall Islands. In J. A. Boutilier, D. T. Hughes and S. W. Tiffany (eds.), *Mission, Church, and Sect in Oceania*, Ann Arbor: University of Michigan Press, pp. 251-273.
- 1979 *Foreign Ships in Micronesia: A Compendium of Ship Contacts with the Caroline and Marshall Islands, 1521-1885*. Saipan: Trust Territory Historic Preservation Office.
- 1983 *The First Taint of Civilization: A History of the Caroline and Marshall Islands in Pre-Colonial Days 1521-1885*. Pacific Islands Monograph Series 1, Honolulu: University of Hawaii Press.
- 土方久功
1974 『流木——ミクロネシアの孤島にて』 未来社 (初版 1943年 小山書店)。
- 石森秀三
1974 「ニューゼaland・マオリとキリスト教——民族宗教の衰微とキリスト教」『人文学報』(京大人文研) 38: 41-61。
- 1982 「ニューゼaland・マオリの民族主義運動——脱部族化とキリスト教」中牧弘允編『神々の相克——文化接触と土着主義』新泉社, pp. 257-287。
- 1985a 『危機のコスモロジー——ミクロネシアの神々と人間』福武書店。
- 1985b 「子どもの病気と世界観——ミクロネシア・サタワル島の事例から」岩田慶治編『子ども文化の原像——文化人類学的視点から』日本放送出版協会, pp. 91-111。
- 1985c 「ミクロネシア・サタワル島の『うた』の象徴性」藤井知昭編『日本音楽と芸能の源流——日本文化の源流を求めて』日本放送出版協会, pp. 193-212。
- 1987 Secret Knowledge on Satawal Island, Central Carolines. *Man and Culture in Oceania*, 3 (Special Issue): 267-278.
- KEATE, George
1788 *An Account of the Pelew Islands, situated in the Western Part of the Pacific Ocean, composed from the Journals and Communications of Captain Henry Wilson, and Some of his Officers, who, in August 1783, were there Shipwrecked in the Antelope, a Packet Belonging to the Honourable East India Company*. 2nd ed. London: G. Nicol.
- ル・ゴッフ, ジャック
1988 『煉獄の誕生』(*La naissance du purgatoire*) 渡辺香根夫・内田洋訳 法政大学出版局。
- LESSA, W. A.
1950 Ulithi and the Outer Native World. *American Anthropologist* 52(1): 27-52.
- 1966 *Ulithi: A Micronesian Design for Living*. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- MARSHALL, Mac and Leslie B. MARSHALL
1974 Holy and Unholy Spirits: The Effects of Missionization on Alcohol Use in Eastern Micronesia. *Journal of Pacific History* 11(3-4): 135-166.
- MONBERG, Torben
1962 Crisis and Mass Conversion on Rennell Island in 1938. *Journal of the Polynesian Society* 71: 145-150.
- 1967 An Island Changes its Religion: Some Social Implications of the Conversion to Christianity on Bellona Island. In G. A. Highland, R. W. Force, A. Howard, M. Kelly and Y. H. Sinoto (eds.), *Polynesian Culture History: Essays in Honor of Kenneth P. Emory*, B. P. Bishop Museum Special Publication 56, Honolulu: B. P. Bishop Museum, pp. 565-589.
- 中山和芳
1985 「ボナペ島におけるキリスト教の受容をめぐる社会変化」『国立民族学博物館研究報告』9(4): 851-914。
- 1988 「Factionと反乱——スペイン統治下のボナペ島社会」須藤健一・山下晋司・吉岡政徳(共編)『社会人類学の可能性 I ——歴史のなかの社会』弘文堂, pp. 114-136。
- NASON, James D.
1978 Civilizing the Heathen: Missionaries and Social Changes in the Mortlock Islands. In J. A. Boutilier, D. T. Hughes and S. W. Tiffany (eds.), *Mission, Church, and Sect in Oceania*, Ann Arbor: University of Michigan Press, pp. 109-137.

須藤健一

- 1980 「母系社会における忌避行動——ミクロネシア・サタウル社会の親族体系(1)」『国立民族学博物館研究報告』5(4): 1008-1046。
- 1984 「サンゴ礁の島における土地保有と資源利用の体系——ミクロネシア、サタウル島の事例分析」『国立民族学博物館研究報告』9(2): 197-348。
- 1988 「戦争・酒・自殺——トラックの若者の100年」須藤健一・山下晋司・吉岡政徳(共編)『社会人類学の可能性 I——歴史のなかの社会』弘文堂, pp. 91-113。

牛島 巖

- 1987 『ヤップ島の社会と交換』弘文堂。

Wilson, James

- 1799 *A Missionary Voyage to the Southern Pacific Ocean Performed in the Years 1796, 1797, 1798, in the Ship Duff.* London: T. Chapman for the Missionary Society.